

飲酒行動の背景となる集合的無意識の存在の提言； ユングの象徴論に基づく考察

—新しいエタノール乱用防止へのアプローチ—

Proposal for the existence of collective unconsciousness
as a background of drinking behavior ;
consideration based on Carl Gustav Jung's symbolism theory
—A new approach for controlling ethanol abuse—

横山 裕一*

慶應保健研究, 38(1), 067-074, 2020

要旨：酒乱用の行動背景特定はその予防に重要である。本論ではユングが示した人類共通の集合的無意識（CUC）の概念に基づき飲酒行動の背景のCUC（CUC-D）の存在を検証，その特定の意義を考察した。ユングは世界の独立した諸地域で類似の神話，民話，宗教教義が伝承された事実からCUCを想起，それらに共通して語られる新生をCUCを投影する象徴（元型）の一つと考えた。飲酒習慣も諸文明で独立に発展した。また，飲酒動機の一つに，不快な記憶の忘却や記憶の統合（新概念構築）を介し新生に寄与しうる，睡眠願望が想定される。また，睡眠を介さない新生と飲酒の関係も特定できる。これらのことからCUC-Dの存在は妥当と考えた。飲酒・睡眠関係から，エタノール刺激で誘眠作用を齎すGABA（A）受容体をCUC-D責任分子候補の一つと考えた。アルコール依存症者も同受容体刺激目的で飲酒するが，それはNMDA受容体誘導に伴う興奮系過増強の鎮静目的で，本来のCUC-Dに基づく飲酒ではない。ユングは集団行動では，時に，CUCが退行し，狂暴化などの負の新生が起こるとしているが，急性アルコール中毒の一因の狂暴な飲酒の背景に集団飲酒が齎すCUC-Dの退行が想定される。本来の新生を伴うCUC-Dが消失・退行した飲酒を酒乱用とする定義は酒乱用の認識を深め，その予防に資する可能性がある。

keywords：集合的無意識，新生，アルコール乱用，

N-methyl-D-aspartate（NMDA）型受容体，GABA（A）受容体

Collective unconsciousness，Rebirth，Alcohol abuse，

N-methyl-D-aspartate（NMDA）receptor，Gamma-aminobutyric acid（A）receptor

はじめに

Durkheimは，社会に形成された意識（collective consciousness，集合的意識；CC）が個人の価値

観や行動の決定に影響しうるとしている¹⁾。筆者は，日本の社会に存在する酒の一气飲み是認のCCを特定し，それが本邦の一气飲み文化の

*慶應義塾大学保健管理センター

（著者連絡先）横山 裕一 〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

背景となり、その是正が新しい一気飲み予防のアプローチになると提言した²⁾。

一方、Jung (ユング) は、やはり個人の価値観や行動に影響を与えうる、全人類に普遍的な無意識 (集合的無意識, collective unconsciousness ; CUC) の存在を提言した³⁾。本論では、その提言に基づき、飲酒関連のCUC (CUC-related to drinking behavior, CUC-D) の存在を検証した。併せて、ユングのCUC理論の解説、酒乱用予防におけるCUC-Dの特定の意義の考察も行った。

ユングのCUC理論：CUC, 元型, 新生

1) ユングとフロイトの無意識

Freud (フロイト) は、①個人の不快な経験は不安軽減目的の自己防衛力 (抑圧) で「意識」から排除され、②「無意識」という深層に押し込められる、③「無意識」は通常認識されないが、④ヒステリーやコンプレックス感情の原因となる、という理論体系を構築した⁴⁾。それに対し、当初フロイトに師事していたユングは、フロイトが提唱した個人的体験に基づく「無意識」を「個人的無意識, personal unconsciousness ; PUC」と命名し、さらにその下層に別にCUCが存在すると主張した³⁾。尚、フロイトは生涯CUC理論を認めていない。

2) CUCの存在根拠

ユングは、「人的交流が無い世界の諸地域に類似の神話や民話が伝承されている」事実から人類共通の無意識 (CUC) の存在を想起した³⁾。

本件への筆者の解釈を示す。名画 (映画) は長くの人々の記憶に残り、後世に語り継がれるが、その陰で無数の映画が忘れ去られる。太古においても、多くの物語が作られ、その中から人々の心に残った作品のみが選択的に伝承され、他は廃れたと考えるのは自然である。記録媒体が無い時代では猶更である。ところが、人的交流も無く言語も異なる太古の

諸地域に、共通した特定の物語が伝承されている。ユングは、その事実は「多くの人類が特定の嗜好とそれを醸成する無意識CUCを持っている」と考える以外に説明できないとした。しかし、フロイトも然り、その提言は俄には信じ難い。

映画「Star Wars (SW)」の人気レベル (第一作公開から40年以上継続、国境や民族を超え全世界へ浸透) は他の名画のそれとは異質で、世界の人々の本映画に対する特別な嗜好の存在を窺わせる。注目すべきは、製作者George Lucasの本映画の基盤は彼の神話研究にあるという証言で⁵⁾、それが本映画の人気の背景の一部とも論評されている⁵⁾。即ち、現代人の「SW」への嗜好性の少なくとも一部は「神話 (mythology)」嗜好性で、多くの現代人が、国境を越えて、その嗜好性を醸成するCUC (CUC-M) を有していることを示唆する。このCUC-Mの存在はユングからの預言に他ならず、ユングの太古の人々の多くがCUC-Mを有していたとする彼の考えは決して荒唐無稽では無い。

ユングはCUCの根拠として、ある妄想型分裂病患者の「太陽に管が見え、頭を左右に振ると、その管も左右に動き、風が吹く」という一見意味不明の言動と類似の文言が1～4世紀頃にローマで流行した密教Mithraismの教義⁶⁾中に記載されていたこと、ユング自身が、フロイトとの関係で精神不調に陥った時に沢山描いた円を基軸とする絵が、中国の宗教「道教」の典礼書に掲載される曼荼羅と類似していたこと⁷⁾も挙げている。尚、これらの所見は本論のCUC-Dの存在証明には用いられないので、解説は省く。

3) CUCと元型

ユングは、CUCから醸成された表現型を「archetype ; 元型」と命名した。上述の神話や伝説に現れる類似の物語、宗教の教義、抽象的絵画などがその例で、元型をCUCの象徴と考えた。彼は元型の解明がCUC、さらには

人の心理の解明になると考えている³⁾。尚、彼は元型は人が遭遇する状況の数だけ存在すると述べている（文献3 p. 130）。筆者は上述の「SW」への嗜好性もその一つと考える。

4) 元型としての新生

ユングは元型の中で、世界各地で独立して記述された神話、民話、宗教の教義に「新生（生まれ変わり）」の記載が多いことに着目、「新生」を元型の一つと想定、それを象徴とするCUCが存在すると考えた（文献3 p. 73～118）。

紙面数の制約で詳細は省くが、ユングは新生の表現型を5つの階層（文献3 p. 74～77）と9つの背景心理に分類している（文献3 p. 78～101, 表1）。尚、彼は表1に記載された以外の新生の表現型の存在も想定している（文献3 p. 74）。

5) 正の新生と負の新生

新生は人間の根源的な欲求で、通常は善とされ、それ（正の新生）は人生の目的の一つとも推察される。一方、ユングは悪（負）の新生も想定している。表1中の「集団との同一化」は、集団内では、時に、各個人の中に低水準の「集団魂」や「動物魂」が生じ、個人がそれらに支配され、低レベルになることと説明されている（文献3 p. 89～91）。ユングは魂とCUCを同義としているので、「集団では時に低水準のCUCが生まれ、そこから低水準の新生が生じる」とも読める。彼は、群

衆の中で個人は暗示にかかり易い、責任感が薄まる、自己の力が膨張する錯覚に陥るとも述べているが（文献3 p. 89～91）、この提言の背景に1914～8年の第一次世界大戦⁸⁾や1920年のナチス結成⁹⁾が想起される。映像に残る1935年のニュルンベルクのナチス党員集会¹⁰⁾の光景は集団との同一化で人々が狂暴化する様の典型例であろう。負の新生は人生の目的ではないと推察される。

筆者は、人は個人とも同一化しうると考える。高い（または低い）理念を持つ人との同一化で人は高まり（または墮落し）、これは正の（または負）の新生である。また、「集団との同一化」で「集団」を「社会」に置き換えると、社会と同一化した個人に、時に低水準のCUCや新生が生まれると読め、筆者はこれを大衆化と考える。大衆化も時に悪となる。

ユングのCUC理論に基づくCUC-Dの同定

1) 酒の起源と神話の起源の共通性

考古学に基づく飲酒の起源の見解「メソポタミア文明で紀元前5400年頃からワインが、紀元前3400年頃からビールが飲まれていた、また黄河文明で、紀元前7000年頃から何等かの酒が飲まれていた」¹¹⁾は広く首肯されている。また「紀元前1900年頃の中国の夏王朝での米の発酵酒¹²⁾」「紀元前3000年頃のエジプトのビール¹³⁾」に関する文字記録が存在する。加えて、1532年のスペイン征服まで他文明か

表1 ユングが示す新生の5つの階層と9つの背景心理

< 5つの階層 >		
① 輪廻	② 間接的新生	③ 再度の受肉
④ 人の中で起こる新生	⑤ 復活	
< 9つの背景心理 >		
1) 生の超越性		
2) 主体の変化		
① 人格の縮小	② 人格の膨張	③ 内的構造の変化
④ 集団（個人，社会）*との同一化	⑤ 神または英雄との同一化	
⑥ 呪術による変化	⑦ 技術による変化	⑧ 自然な変化

文献3より作成

*：筆者による修正，詳細は本文に記述

ら孤立していたアンデス文明にトウモロコシの口噛み酒（chicha）が継承されている¹⁴⁾。

エジプト文明とメソポタミアでは共通してワインやビールが飲まれていたが、その背景として両文明間の交流¹⁵⁾が証明されている。しかし、その2文明、黄河文明、アンデス文明間の交流の証拠はなく、飲酒習慣は少なくともこれら3地域で独立して始まったと考える。各地域の酒の原材料や製法の独自性もその独立性を示唆する。即ち、飲酒の起源（隔絶した諸地域で類似の飲料摂取習慣が始まった）とユングが示す神話の起源（隔絶した諸地域で類似の物語が形成された）に共通性が認められる。

全人類共通のCUC-Mから醸成される（その元型の）神話嗜好性が、独立した諸地域に類似の神話を選択的に定着させた可能性と同様、全人類共通のCUC-Dの元型の酒嗜好性が、独立した諸地域に飲酒習慣を選択的に定着させたとの想定は理に適う。CUC-Mは多くの物語から神話を、CUC-Dは多くの飲料からエタノールを人類に選択させたということである。実際に、上述のSWと同様、飲酒習慣が長い間廃ることなく、世界中で受け継がれている事実も国境・民族を超えた人類共通のCUC-Dの存在を示唆する。

2) 飲酒と新生

飲酒動機の一つに困難や不快感の忘却がある。Saint-Exupryの「星の王子様」¹⁶⁾に登場する酔っ払いは「飲酒の目的は自分の恥部の忘却」と述べている。また、河島英五氏は「酒と泪と男と女」¹⁷⁾でその忘却が「眠り」を介すると歌っている。

エタノールはgamma-aminobutyric acid (A) (GABA (A)) 受容体を刺激し、誘眠作用を齎す（詳細は次節で述べる）¹⁸⁾。また、近年「睡眠が定着させる記憶とさせない記憶を整理している」¹⁹⁾ことが示されており、「飲酒—睡眠—忘却」関係は科学的にも肯定される。この過程で不快な記憶が消去され、その

清算で再出発が叶えばそれは「新生」である。

さらに、睡眠が記憶の統合を行うとの知見もあり²⁰⁾、「飲酒—睡眠—記憶の再統合」のスキームも描ける。記憶（知識）の再統合は新しい概念、発想、アイディアの構築を生み、それらと共に生きることも「新生」に他ならない。これらの知見は「飲酒—睡眠—新生」関係を支持する。尚、慢性飲酒者においては、記憶の統合を行う海馬が障害され²¹⁾、時に、この関係は成立しない。

睡眠と無関係な飲酒と新生の関係も特定できる。中世の欧州の錬金術師は「永遠の命の獲得」（表1の「生の超越性」に該当する新生）を追求したが²²⁾、彼らは蒸留酒にその薬効があると信じ、蒸留酒を「aqua vitae（命の水）」と崇めていた。この史実も新生と飲酒の関係を示唆する。

日本の昔の生活には「褻（日常）と晴れ（非日常）」の循環があったとされる。人々は褻の連続で肅々と働くための活力が枯渇してくると、晴れの席（宴席）を設け、活力の充填を図ったとされる²³⁾。即ち、晴れの席は表1の「復活」にあたる新生の場で、酒は晴の席の重要なアイテムであった。

筆者は、日本に一气飲み称賛の伝承がCCとして存在し、それが日本の一気飲み是認の背景の一部になっている可能性を報告した²⁾。

① 結婚や師弟関係を結ぶ儀式の盃（三三九度の盃、固めの盃）、② 中国発祥の「曲水の宴」での罰則の盃（筆者はそれが東洋で今も残る「お詫び一气飲み」のCCとも考える）、③ 正親町天皇から信長、秀吉と伝わり福島正則が所有していた名槍「日本号」を福島から奪い取った黒田藩の家臣、母里太兵衛の一气飲み（黒田節で謡われるエピソード）などであるが、これらも「新生」と深い関係にある。①は新しい同志との出発、②は失態を水に流す悪から善への変容、③は名槍を入手しての人生の高いステータスへの登壇で、夫々表1の「集団、他人、社会との同一化」「内的構造の変

化」「人の生涯の中で起こる新生」に該当すると考える。

ユングは新生を元型の一つと考え、それに対応するCUCの存在を想定したが、新生は飲酒の動機の一つでもあり、ユングのロジックから、それに対応するCUC-Dの存在が想定できる。

CUC-Dの責任分子候補としてのGABA

(A) 受容体；

近年，エタノールの薬理作用として，脳内の鎮静系（GABA（A））受容体と興奮系N-methyl-D-aspartate（NMDA）型受容体¹⁸⁾の刺激が注目されている（図1-A）。

GABA（A）受容体は，神経伝達物質GABA依存性のCl⁻チャンネルで，脳細胞内に鎮静を齎す。同受容体に，ベンゾジアゼピン系薬，バルビツールなどの麻酔薬，ステロイドなどが結合すると，作用が強まり，睡眠作用，抗不安作用，麻酔作用などが惹起されるが，エタノールも同様の作用を示す（図1-B）。前節で「飲酒—睡眠—新生」関係を提唱したが，エタノールによる誘眠作用を司る本受容体はこのスキームの説明に合目的で，新生を元型とするCUC-D

の責任分子候補として適任である。

ユングはCUCに遺伝性がある²⁴⁾，その質の一部は交感神経系の変化の認識であるなどと想定している（文献3 p. 159～160）。本受容体は遺伝し，本受容体による鎮静作用は副交感神経系刺激作用となるため，本受容体をCUC-D責任分子候補とすることはユングの想定とも矛盾しない。

CUC-Dの消失・変質；酒乱用の新しい定義

上述の「星の王子様」に登場する酔っ払いは，「自分の恥部の忘却のために酒を飲む」と言いながら，「自分が忘れるべきこと」も忘れており¹⁶⁾，そこに新生は無い。18世紀半ばからの産業／商業革命でアルコール飲料は大量生産，販売，消費され，その結果，飲酒習慣の大衆化が起こり，それに伴い酒乱用の社会問題化が起きた²⁵⁾。ユングの理論から大衆化によるCUCの低水準化を上述したが，酒の大衆化がCUC-Dの低水準化を起こし，低水準の飲酒が定着し，それがアルコール中毒（酒乱用）を起こすというスキームが想定される。

酒乱用には慢性と急性の問題がある。大量の慢性飲酒は，脳内グルタミン酸依存性Ca²⁺チャ

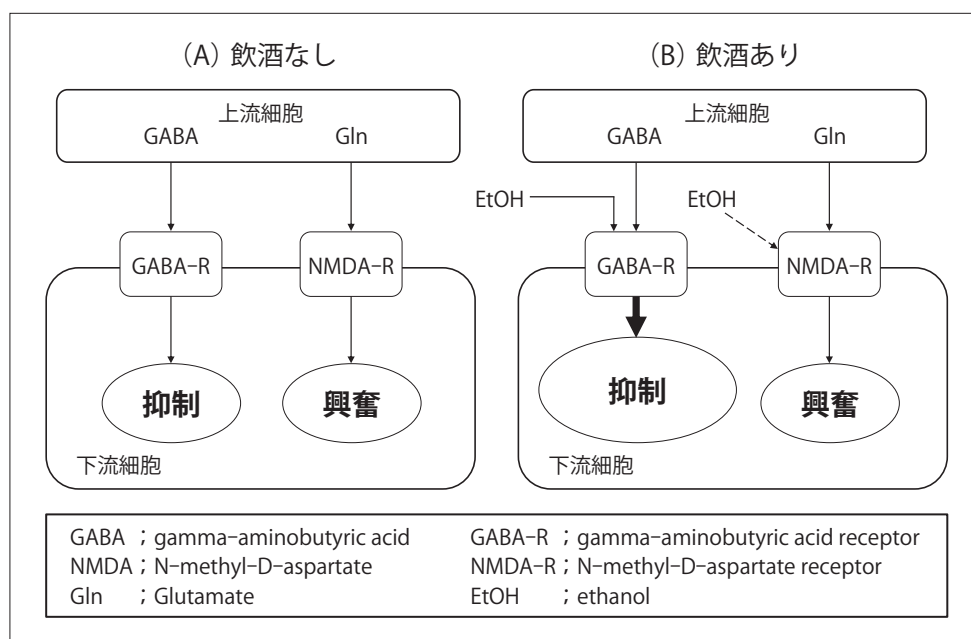


図1 GABA受容体とNMDA受容体（健常者）

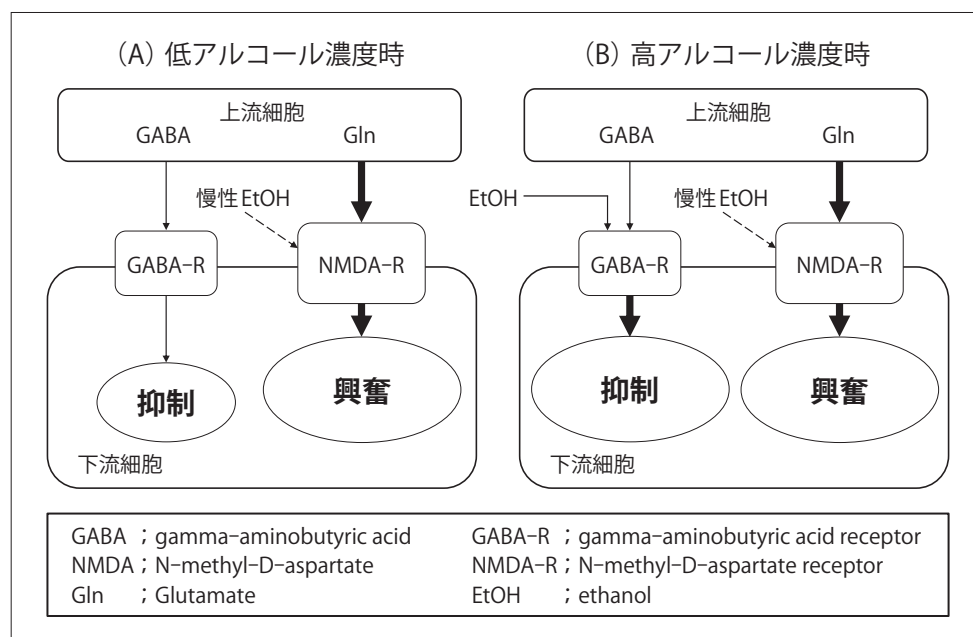


図2 GABA受容体とNMDA受容体（依存症者）

ンネルで脳細胞内の興奮を惹起するNMDA型受容体の誘導を起こし（図2-A），不快感，イライラ感，不眠，血圧上昇などを惹起するが，これはアルコール依存症の本態の一側面とされる¹⁸⁾。同依存症患者はその解消目的で，GABA(A)受容体を介した飲酒の鎮静作用を求めて飲酒をする。その結果，鎮静系と興奮系は一時的に拮抗し，症状は落ち着くが（図2-B），その後，血中エタノール濃度が低下すると，GABA(A)受容体刺激は減少してしまう。しかし，短時間のエタノール濃度低下ではNMDA型受容体の誘導は解消されない（通常，その正常化には数週間の禁酒が必要），再度，興奮＞鎮静となり（図2-A），興奮症状が出現，症状緩和のために再度飲酒する¹⁸⁾。この同依存症患者の飲酒動機はGABA(A)受容体刺激はNMDA型受容体誘導に伴う過剰興奮の相殺を目的とし，CUC-D本来の新生願望は消失している。

ユングは，集団と個人が同一化すると，時にCUCの低水準化（退行・変性）が起こり，その人は全能化したという錯覚に陥り，狂暴化という負の新生が起こるとしているが，CUCをCUC-Dに置換すると集団飲酒で見られる狂暴な飲酒，自己の限界を超えた過剰飲酒などの急性

酒乱用の発症病理の一部を説明できると考える。

これらの知見から，飲酒を「本来のCUC-Dに起因する飲酒を正常飲酒」，「CUC-Dの消失または変性に起因する飲酒を酒乱用」に区分できる。前者は（人生の目的とも推察される）正の新生を齎すが，後者は新生とは無関係で，時に負の新生を齎す。前者は肯定され，賛美に値することもあるが，慢性・急性酒乱用の原因にもなる後者は肯定されない。

結語；CUC-D特定の意義

ユングのCUC理論から，CUC-Dを提唱，酒乱用を「変性・退行したCUC-DまたはCUC-Dの消失に基づく飲酒」とする新しい定義を提言した。また，「正の新生」が正常CUC-Dの元型の一つである可能性を示し，飲酒と「新生」の関連を示した。

これらの知見から，①中世に「命の水」であった酒が，近世に「命を奪う水」に退行した理由の一つを酒の大衆化によるCUC-Dの退行に求めることができた ②各人の飲酒を正常CUC-Dの逸脱程度，即ち，「その飲酒に新生はあるのか？」の判定から評価し，その観点からの節酒・禁酒指導を可能にした ③正常飲酒が人にキリス

ト教の奥義でもある「新生」を実感させる可能性から、「酒は天の美禄（貝原益軒²⁶⁾）」「Malt does more than Milton can to justify God's ways to man. (AE Houseman²⁷⁾）」などの酒礼賛が理解可能になった ④ 筆者が、酒乱用是認のCCと特定した三々九度の盃、固めの盃、曲水の宴の盃、黒田節で描かれる盃など²⁾の背景にも「新生」が特定され、「一気飲み」は肯定できないものの、これらの文化の価値を肯定できるようになった ⑤ 適正飲酒の範囲での会合での飲酒や日々の晩酌など日常の飲酒からも人間関係の構築や自己の鼓舞などを介して「新生」が起こる可能性があり、それらの肯定根拠が明確になった ⑥ 過剰飲酒者の自己弁護「酒は良いもので、いくら飲んでも良い」に対しては、それは肯定／否定される飲酒の混同であると明示できるようになった、などの新しい理解が生まれ、飲酒習慣の認識を深めることができた。このことは酒乱用予防に資すると考える。

尚、ユングも自認する「(神話、曼荼羅、精神病患者の言動、宗教経典などに基づく) ユング研究は神秘主義的」との批判がある（文献3 p. 12）。今回試みたユング研究への飲酒や睡眠の科学的知見からのアプローチは、ユング研究に新しい方向性を示した可能性がある。

文献

- 1) エミール・デュルケーム. 社会学的方法の基準（宮島喬訳）. 岩波書店；東京；1978.
- 2) 横山裕一. デュルケームの集団的意識による個人行動の拘束理論と自殺モデルを用いた日本における新しい急性アルコール乱用の理解—大学における飲酒教育の新機軸の構築—. 慶應保健研究 2018；36：53-60.
- 3) カール・グスタフ・ユング. ユングの象徴論（野村美紀子訳）. 思索社；東京；1981.
- 4) ジークムント・フロイト. 精神分析入門（懸田克躬訳）. 中公文庫；東京；2019.
- 5) Persall S. Mythology in Star Wars；Move over, Odysseus, here comes Luke Skywalker. Petersburg Times Film Critic.
<https://folkstory.com/articles/petersburg.html>
(cited 2020-07-05)
- 6) Dieterich A. Eine Mithrasliturgie (1st enlarged edn). Teubner；Leipzig；1903.
- 7) カール・グスタフ・ユング. 個性化とマンダラ（林道義訳）. みすず書房；東京；1991.
- 8) World War I. In：Wikipedia.
https://en.wikipedia.org/wiki/World_War_I
(cited 2020-02-05)
- 9) Adolf Hitler. In：Wikipedia.
https://en.wikipedia.org/wiki/Adolf_Hitler (cited 2020-02-05)
- 10) Triumph of the Will (1935). In：Dailymotion web site.
<https://www.dailymotion.com/video/x6uajey/>
(cited 2020-07-05)
- 11) Tucker A. The Beer Archaeologist. Smithsonian Magazine.
<https://www.Smithsonianmag.com/history/the-beer-archaeologist-17016372/?no-ist=&page=2>
(cited 2020-02-05)
- 12) 中国酒. In：中国まるごと百科事典.
<https://www.allchinainfo.com/chinese-cuisine/1019> (cited 2020-02-05)
- 13) History of ancient Egyptian beer. In：British museum web site.
<https://blog.britishmuseum.org/a-sip-of-history-ancient-egyptian-beer/> (cited 2020-02-05)
- 14) Hayashida FM. Chicha. In：Archaeology of Food：An Encyclopedia. Metheny KB and Beaudry MC (eds.) Rowman & Littlefield Pub Inc；New York；2015. p. 97-98.
- 15) Joshua J. Mark. Beer in Ancient Egypt. In：Ancient History Encyclopedia.

- <https://www.ancient.eu/article/1033/beer-in-ancient-egypt/> (cited 2020-02-05)
- 16) アントワーン・マリー・ジャンーバティスト・ロジェ・ド・サン＝テグジュペリ. In: 星の王子様 (倉橋由美子訳). 文春文庫; 東京: 2019.
- 17) 河島英五. 酒と泪と男と女.
<https://www.utamap.com/showkasi.php?surl=B09242> (cited 2020-02-05)
- 18) Erdozain AM and Callado LF. Neurobiological alterations in alcohol addiction: a review. *Addiction* 2014; 26: 360-370.
- 19) Pace-Schott EF, Germain AA, Milad MR. REM sleep and memory. *Curr Opin Neurobiol* 2017; 44: 167-177.
- 20) Lewia PA, Knoblich G, and Poe G. How Memory Replay in Sleep Boosts Creative Problem-Solving. *Trends Cogn Sci* 2018; 22: 491-503.
- 21) Beresford TH, Arciniegas DB, Alfors J et al. Hippocampus volume loss due to chronic heavy drinking. *Alcohol Clin Exp Res* 2006; 30: 1866-1870.
- 22) Merriam-Webster. Whiskey and whisky and alchemy.
<https://www.merriam-webster.com/words-at-play/whiskey-and-whisky-and-alchemy> (cited 2020-02-05)
- 23) 波平恵美子. In: ケガレの構造. 青土社; 東京: 1984.
- 24) カール・グスタフ・ユング. In: 分析心理学 (小川捷之訳). みすず書房; 東京: 1976.
- 25) Anderson P and Baumberg B. Alcohol in Europe.
<http://leonardo3.dse.univr.it/addiction/documents/External/alcoholineu.pdf#> (cited 2020-02-05)
- 26) 貝原益軒. In: 養生訓 (松田道雄訳). 中公文庫; 東京: 2020.
- 27) Houseman AE. Terence. This is Stupid Stuff.
<https://stuff.mit.edu/people/dpolicar/writing/poetry/poems/terence.html> (cited 2020-02-05)